

2月予報（全12枚）

病防第56号

令和5年（2023年）1月27日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

令和4年度（2022年度）発生予報第11号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和4年度（2022年度）病虫害発生予報第11号（2月予報）

気象予報：令和5年（2023年）1月26日福岡管区気象台発表

向こう1ヶ月の気象予報（単位：%）

予報対象地域	要素	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
九州北部全域 （含、山口県）	気温	40	30	30
	降水量	40	40	20
	日照時間	30	30	40

【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 トマト	疫病	並	並	並（±）	やや多～少 （±）	降水並～少 （±）	
	葉かび病	少	並	やや少（-）	並（±）	降水並～少 （±）	
	黄化葉巻病	並	少	並（±）	並（±）	（コナジラミ） 気温低（-）	
冬春ナス	すすかび病	並	やや少	並（±）	やや少～並 （±）	降水並～少 （±）	



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 キュウリ	うどんこ病	並	やや少	やや少(-)	並(±)	降水並～少 (±)	
	べと病	やや多	並	多(+)	やや多(+)	降水並～少 (±)	
	退緑黄化病	やや多	並	やや多(+)	やや多(+)	(コナジラミ) 気温低(-)	
イチゴ	ハダニ類	並	並	並(±)	並(±)	気温低(-)	
	アザミウマ類	並	やや少	並(±)	やや多～並 (±)	気温低(-)	
冬春 果菜類	灰色かび病	やや多	やや多	ナス、キュウリ やや多 トマト、イチゴ 並 (+)	トマト、キュウリ 並 ナス やや少～並 イチゴ 並～やや多 (±)	降水並～少 (±)	
	コナジラミ類	並	並	トマト やや多 ナス、キュウリ やや少 (±)	トマト 並～やや多 ナス、キュウリ 並 (±)	気温低(-)	
	アザミウマ類 (イチゴ除く)	並	並	ナス、キュウリ 並 (±)	ナス 並 キュウリ やや少 (±)	気温低(-)	

予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」

2 予想発生量、根拠、対策等

冬春トマト

1) 疫病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 1月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

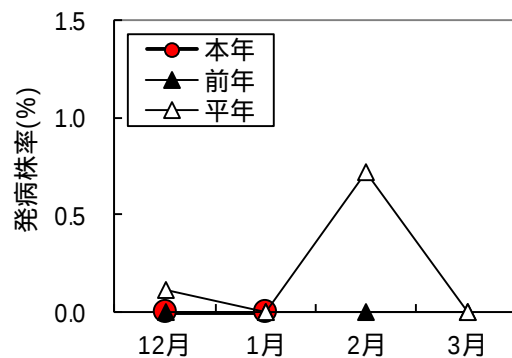
(3) 対策 ア 発病後は防除が困難なので、薬剤防除は予防に重点をおく。前年に発生が多かった場合は、定期的に薬剤散布を行う。

イ 窒素質肥料の多用を避ける。

ウ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

エ 発病果、発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



疫病的発病株率の推移

(冬春トマト)

2) 葉かび病

(1) 発生量：少

(2) 根拠 ア 1月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年2.5%）、平年比やや少の発生であった（-）。

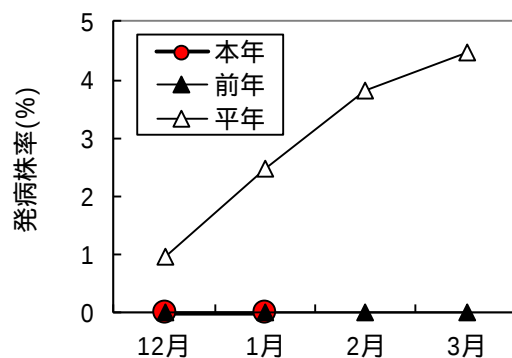
(3) 対策 ア 県内の抵抗性品種栽培ほ場でも発病が確認されているため、抵抗性品種であっても発病に注意する。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

ウ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

エ 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



葉かび病的発病株率の推移

(冬春トマト)



3) 黄化葉巻病

(1) 発生量：並

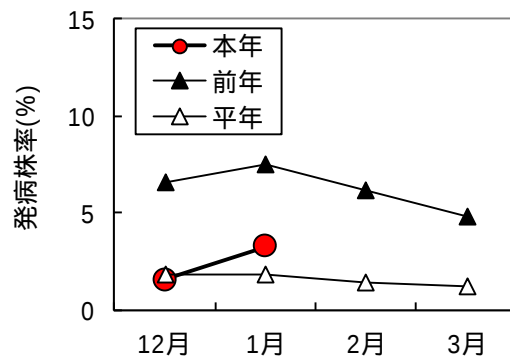
(2) 根拠 ア 1月の巡回調査では、発病株率3.3%（平年1.9%）と平年並の発生であった（±）。

イ 1月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉率1.9%（平年0.2%）と平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア タバココナジラミを施設内で「増やさない」対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

イ 施設内の雑草はタバココナジラミの重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着板トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。



黄化葉巻病の発病株率の推移
(冬春トマト)

冬春ナス

1) すすかび病

(1) 発生量：並

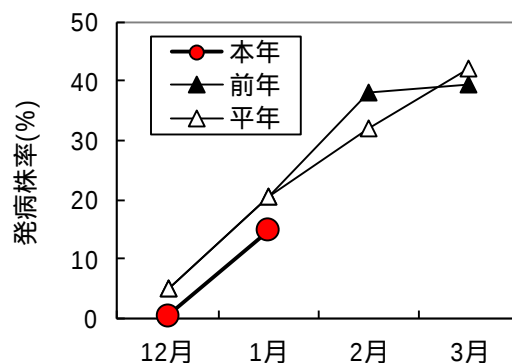
(2) 根拠 ア 1月の巡回調査では、発病株率14.8%（平年20.5%）と、平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

ウ 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



すすかび病の発病株率の推移
(冬春ナス)



キュウリ

1) うどんこ病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 1月の巡回調査では、発病葉率5.3% (平年11.7%)と、平年比やや少の発生であった(-)。

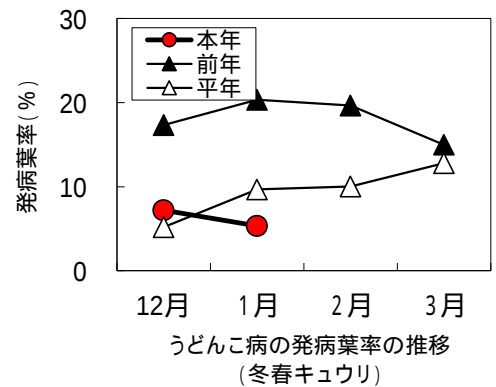
(3) 対策 ア 多発後は、防除が困難なので初期防除を徹底する。

イ 過繁茂を避け、整枝、摘芯等の作業は早めに行う。また、施肥は適正に行う。

ウ 施設内の空気が停滞すると多発し易いので、換気に努める。

エ 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) ベと病

(1) 発生量：やや多

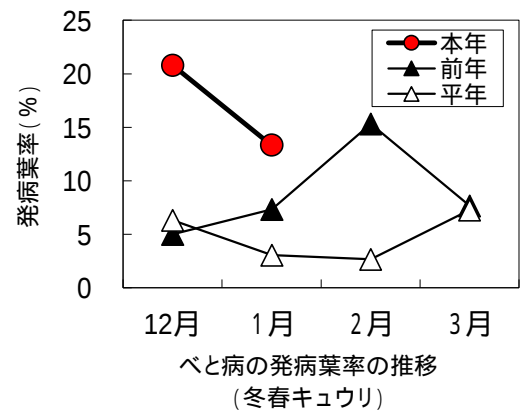
(2) 根拠 ア 1月の巡回調査では、一部のほ場で多発生が認められ、発病葉率13.3% (平年3.9%)と、平年比多の発生であった(+)。

イ 防除員報告では、1月の発生量は平年比やや多であった(+)。

(3) 対策 ア 湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、過湿を避け、肥培管理に注意する。

イ 多発生後は防除が困難なので初期防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) 退緑黄化病

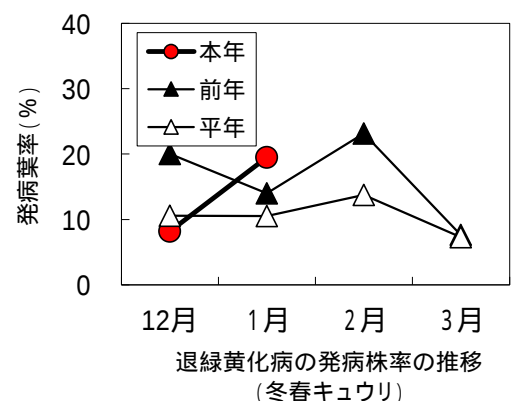
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 1月の巡回調査では、発病葉率19.5% (平年11.3%)と平年比やや多の発生であった(+)。

(3) 対策 ア タバココナジラミを施設内で増やさない対策を徹底する(3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照)。

イ 施設内の雑草はタバココナジラミの重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。



イチゴ

1) ハダニ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 1月の巡回調査では、寄生葉率8.3%（平年8.6%）と、平年並の発生であった（±）。

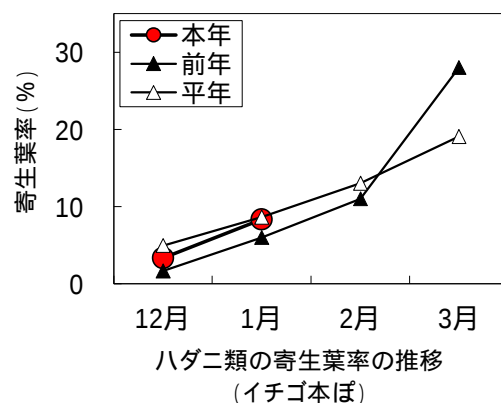
(3) 対策 ア 気温が上昇すると急激に増加するため、発生初期に防除を徹底する（3防除のポイント等の「イチゴにおけるハダニ類の防除対策」を参照）。

イ 寄生葉を早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 薬剤防除の際、事前に下葉かぎを行い、葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

オ 天敵（カブリダニ類）を放飼したほ場でハダニ類が発生している場合は、天敵に影響の少ない薬剤の散布や天敵の追加放飼を行う。なお、それでも発生が多いほ場では、効果の高い殺ダニ剤を使用した上で、薬剤を主体とした防除体系に切り替える。



2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

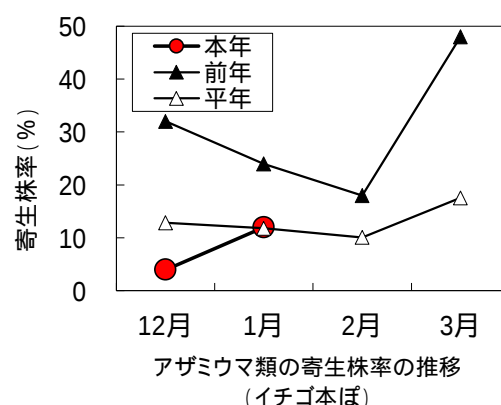
(2) 根拠 ア 1月の巡回調査では、寄生株率12.0%（平年11.8%）と、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 厳寒期も施設内では発生が認められるので、花を注意深く観察することで早期に発見し、発生初期からの防除を徹底する。

イ 施設内の雑草は、重要な発生源となるので除草を徹底する。

ウ 薬剤防除にあたっては、天敵や訪花昆虫（ミツバチ等）への影響を考慮し、薬剤を選定する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



冬春果菜類

1) 灰色かび病

(1) 発生量：やや多

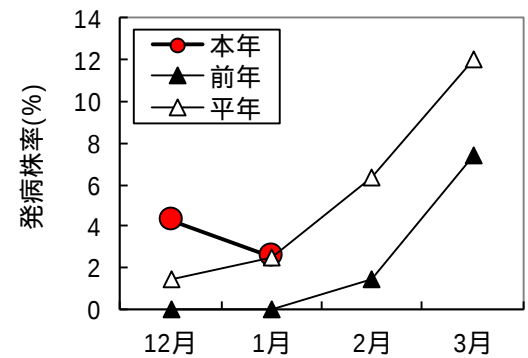
(2) 根拠 ア 1月の巡回調査において、トマトでは茎葉の発病株率2.6%、果実は発病株が確認されず（平年 茎葉2.5% 果実0.1%）平年並、ナスでは発病株率4.0%（平年0.3%）と平年比やや多、キュウリでは発病株率3.3%（平年0.2%）と平年比やや多、イチゴでは葉・果実ともに発病株は確認されず（発病株率平年 葉0.1% 果実0.0%）平年並の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 発病後は防除が困難なので、薬剤防除は予防に重点をおく。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

ウ 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



灰色かび病の発病株率(茎葉)の推移
(冬春トマト)

2) コナジラミ類

(1) 発生量：並

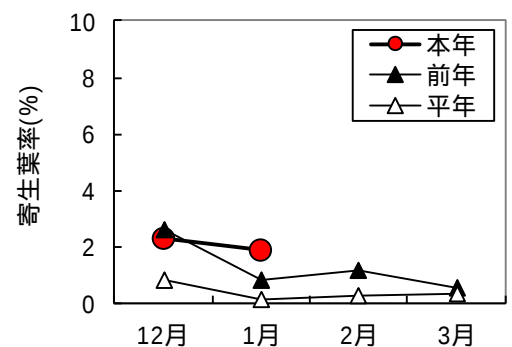
(2) 根拠 ア 1月の巡回調査において、トマトでは寄生葉率1.9%（平年0.2%）と平年比やや多、ナスでは寄生葉率10.4%（平年14.4%）と平年比やや少、キュウリでは寄生葉率0.3%（平年2.4%）と平年比やや少の発生であった（±）。

(3) 対策 ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、キュウリ・メロン退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

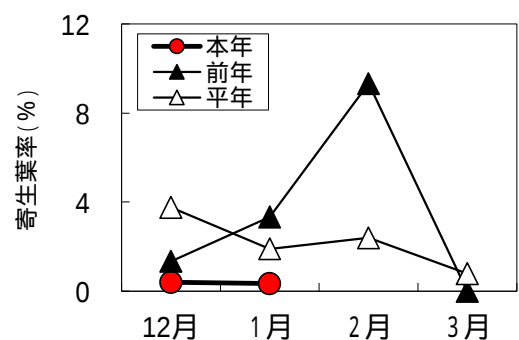
イ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



コナジラミ類の寄生葉率の推移
(冬春トマト)



コナジラミ類の寄生葉率の推移
(冬春キュウリ)



3) アザミウマ類(イチゴ除く)

(1) 発生量: 並

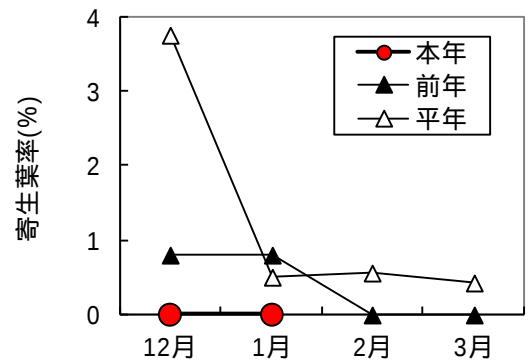
(2) 根拠 ア 1月の巡回調査において、ナスでは寄生葉が確認されず(寄生葉率平年0.5%)と平年並、キュウリでは寄生葉は確認されず(寄生葉率平年0.0%)平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 2月においても、施設内では発生が認められるので、粘着トラップを設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照)。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アザミウマ類の寄生葉率の推移
(冬春ナス)



冬季における多湿、寡日照下での病害対策！！

【技術内容】

- (1) 暖房機や循環扇で空気を循環させ、ハウス内の温度むら、湿度むらをなくす。
- (2) 地面をマルチフィルムで全面被覆したり、うね間（通路）やうね上に敷わらを行う。
- (3) 外張（天井）等の結露は、植物体にかからないように、谷下等へ排水する。
- (4) 整枝、誘引、摘葉等をこまめに行い、採光を良くする。
- (5) 厳冬期（低温、寡日照期）は少量・多回数かん水を心がける（根傷み防止）。
- (6) 液肥を利用した施肥管理を行う（草勢維持）。

【留意事項】

- (1) 最低夜温の確保等、温度管理に注意しながら換気を行う。
- (2) 多湿、寡日照条件下では病害が発生しやすく、収量・品質の低下につながるの
で、病害の早期発見と適期（予防）防除に心がける。
- (3) 病害葉及び病害果等は早期に除去しハウス外に持ち出して適正に処分する。

イチゴにおけるハダニ類の防除対策

現在発生が少ないほ場でも、気温が上昇するにつれて多発生する恐れがあります。そこで、2月中に以下の対策を行い、密度を増加させないようにしましょう。

今後、繁忙期となる収穫時期を迎えるほ場では防除が遅れがちになることから、早めの防除を徹底しましょう。

- (1) 薬剤防除の際は、効果を高めるために事前に下葉かぎを行う。除去した葉はポリ袋に詰めるなどしてほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- (2) 薬剤防除は、十分な液量で薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布し、散布むらをなくす。
- (3) 使用できる殺ダニ剤が少ない場合は気門封鎖剤などの物理的資材を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が低いため、7日程度の間隔で複数回散布する。
- (4) 未発生ほ場への持ち込みを防ぐため、ハダニ類が発生しているほ場の管理作業は最後に行う。なお、親株ほ（育苗ほ）についてはハダニ類を持ち込ませないために、管理作業は最初に行う。
- (5) カブリダニ類を放飼したほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を使用しハダニ類の密度を抑える。ただし、ハダニ類の発生が多く天敵で抑えきれない場合は、殺ダニ剤を中心とした薬剤防除に切り替える。
- (6) 薬剤の中にはミツバチの活動に影響を及ぼすものもあるので、影響の小さい薬剤を選択し、危害が出ないように使用する。農薬は、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守して農薬の安全使用に努める。



野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これからの時期は、野外の微小害虫の数は大きく減少し、野外からの侵入はほぼ無くなります。しかし、温度の高い施設内では冬期でも活発に活動しますので、今後もウイルス病の発生拡大への警戒が必要です。また、地域におけるウイルスの伝染環（つながり）を断ち切るために、冬期においても施設外にウイルスを拡散させないようにする必要があります。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

1 保毒虫を施設内で「増やさない」対策

施設内での感染拡大を防ぐため、施設内に残った微小害虫を増やさないようにしましょう。また、施設内での発病を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

（１）施設内に粘着トラップを設置し、害虫の早期発見、初期防除を徹底する。

（２）ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保毒するため、微小害虫の防除を継続して行う。

（３）発病株は、重要な伝染源となるので適正に処分する。

2 保毒虫を施設外に「出さない」対策

周辺施設の作物や野外雑草にウイルスを定着させないために、栽培が終了した施設から微小害虫を逃がさないようにしましょう。

（１）微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、必ず施設を密閉して植物を枯らす。

（２）施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。密閉処理の期間はタバココナジラミは植物が枯れて１週間以上、アザミウマ類は地温１５℃以上では２週間以上を目安とする。



【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
冬春 トマト	すすかび病	並	巡回調査は寄生葉率0.3%(平年1.5%)で平年比やや少(-)。 防除員報告は平年並(±)。
メロン	べと病	並	防除員報告は平年並(±)。 肥料切れで多発するので、適正な肥培管理を行う。
	つる枯病	並	防除員報告は平年並(±)。 株元付近に発生が多いので、出来るだけ乾燥状態に保つ。
スイカ	つる枯病	並	防除員報告は平年並(±)。 株元付近に発生が多いので、出来るだけ乾燥状態に保つ。
	菌核病	並	防除員報告は平年並(±)。 過度の灌水を避け、施設内の過湿防止に努める。 開花期から予防防除に努める。
レタス	菌核病	並	巡回調査では、発病株は確認されず(発病株率平年0.5%)、平年並(±)。 防除員報告は平年比やや多~並(+)
	灰色かび病	並	巡回調査では、発病株率0.7%(平年0.7%)で平年並(±)。 防除員報告は平年並(±)。
	細菌性病害 (腐敗病、斑点細菌病、軟腐病)	並	巡回調査では、腐敗病の発病株率1.0%(平年0.7%)、 斑点細菌病、軟腐病の発病株は確認されず平年並(±)。
野菜全般	アブラムシ類	並	巡回調査では、トマト・ナス・キュウリで寄生株は確認されず平年並、イチゴで寄生株率4.7%(平年1.4%)と平年比やや多(±)。

【野菜病害虫の共通対策事項】

- ・発病部位は伝染源となるので、早期に除去し処分する(病害)。
- ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。
- ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。
- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」

その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

詳しい内容等については 病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL : 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」